

# 在日外国人留学生の異文化適応に関する 心理学的研究の展望

目白大学大学院心理学研究科 譚 紅艷  
目白大学人間学部 渡邊 勉  
目白大学人間学部 今野 裕之

## 【要 約】

本論文の目的は、在日外国人留学生の異文化適応に影響する要因を明らかにするために、異文化適応に関する心理学的研究のレビューをすることである。最初に、異文化適応の概念を整理した。次に、在日留学生の日常生活上の困難の実態を明らかにし、在日留学生には、人間関係の問題が困難として強く意識されていることを指摘した。さらに、異文化適応の指標を整理した。その後、異文化適応に関連する要因を概観し、属性的要因、对人的要因などさまざまな要因が留学生の適応に影響を与えることが示された。最後に、本論文の全体を通して、今後の研究への示唆として、異文化適応指標として領域ごとに分けて考える必要性、理論的な背景に基づく研究の不十分さ、在日留学生の異文化適応に関するプロセスの検討の不十分さ、また出身地域の限定の必要性和縦断的研究の必要性を提案した。

キーワード：留学生、異文化適応、動機づけ、信頼感

近年、日本への留学生の増加に伴い、留学生の適応に関する研究が盛んに行われ、多くの関連文献が発表されている。研究が増えるにつれ、研究の全体像を把握することは難しくなり、この領域の研究をレビューする必要性が高まっている。これまで、留学生の研究動向を概観したレビュー研究として、まず挙げられるのは留学生の生活適応状況などの実態調査のまとめ（高井，1989）、また、留学生の困難や心身の健康状態に関するものの概観（山崎，1996）がある。この他、ソーシャル・サポート要因に注目し、適応との関連に関する研究をレビューしたものもある（水野・石隈，2001b；田中，1998）。しかし、これらのレビュー研究は10年以上前のものであり、最近では留学生の適応に関わるより具体的な要因の研究が増加してきたことを考えると、新たに留学生の適応研究を概観する必要があると考えられる。そこで、本

論文の目的は、在日外国人留学生の適応に影響する要因を明らかにするために、異文化適応に関する心理学的研究のレビューをすることである。この論文を通して、さまざまな要因の有効性を生かし、留学生の適応を促進し、効果的に適応援助を行うことに役に立つと期待される。

## 1. 研究の背景

留学とは、一般に外国に滞在して修学・研究することを意味する。大学、大学院、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）のいずれかに「留学」という資格で在籍する場合、「留学生」と呼ぶ。一方、私費留学生として日本への留学を希望する場合、日本語学校で「就学」という資格で在籍する場合、「就学生」と呼ぶ。なお、平成22年7月1日から、在留資格「留学」と「就学」が、「留学」に一本化になった。これより、「就学」と「就学生」という用語は今後用

いられなくなる。ただし、本研究で取り上げた先行研究では平成22年以前のものであり、研究の対象者は主に留学生であるが、対象者を就学生とした研究もある。

日本が留学生を受け入れる歴史は、幕末・明治時代に遡る。その後、戦争（日清戦争や日露戦争）を機に、中国からの学生を中心に留学生の人数が急激に増えていたが、日本政府は留学生に対する厳しい管理によって、アジア留学生の反日運動を取り締まり、留学生の人数も減少した。その後、第2次大戦によって中断された留学生制度は、1954年に、外国人国費留学生の受け入れとして再開された。在日留学生が急速に増え始めたのは1980年代に入ってからである。これは「留学生10万人構想」によるものといえる。「留学生10万人構想」とは、当時1万人程度だった留学生数を2000年までに10倍の10万人までに増やそうという政策である。その影響を受け、留学生が急増した。日本学生支援機構（2009）によると、日本が受け入れている留学生総数は132,720人で過去最高である。その中、出身国（地域）別留学生数上位の5位は中国（79,082人）、韓国（19,605人）、台湾（5,332人）、ベトナム（3,199人）、マレーシア（2,395人）となっている。

異文化環境での適応は、異文化適応（cross-cultural adaptation）と呼ばれる。異文化適応に対する関心は、アメリカにおいて最も強く、戦前から研究が進められてきた（Kim, 1988）。その中心課題は移民の文化適応の研究であったが、それに加えて、留学生の異文化適応の問題が注目されるようになった。こういった留学生を対象にした適応研究は、英米両国の研究者を中心に第2次大戦後より行われており、異文化適応研究の中では最も数が多いといわれる。たとえば、適応のU字型説（Lysgard, 1955）、留学生の適応に影響する個人的要因（Sewell & Davidsen, 1956）、留学生の友人関係に焦点を当て、適応との関係を見るもの（Ibrahim, 1970）といった研究が行われてきた。

## 2. 留学生の適応問題

日本での留学生の適応問題は、さまざまな側面よりアプローチされている。ここでははじめ

に、異文化適応の概念を整理する。次に、留学生の日常生活上の困難の実態を明らかにする。さらに、いままで使用されてきた異文化適応指標をまとめる。

### （1）異文化適応の概念的整理

本論文では、在日留学生の異文化適応に影響する要因に焦点を当て、いままでの研究を概観することを目的とするが、まず、ここで異文化適応の概念的整理をする。以下では、はじめに、いままでの異文化適応の定義を整理する。次に、カルチャー・ショックの概念を提示する。さらに、先行研究における異文化適応の概念的整理をしたうえで、本研究における異文化適応の定義を述べる。

異文化適応研究が盛んになるにつれ、異文化適応の概念や理論がそれぞれの研究者によって提唱されてきた。ここではこれまでの異文化適応の定義を概観し、代表的なものを紹介し、概念的整理をする。

異文化適応にはさまざまな定義があり、研究者間で異なっている。たとえば、周（1995）は、異文化適応を「個人と他の文化圏、社会あるいは国家の人たちとの間に調和のとれた満足すべき関係が保たれている状態」と考えた。山岸（1995）は、「異文化環境下で仕事や勉学の目標を達成し、文化的・言語的背景の異なる人々と好ましい関係をもち、個人にとって意味のある生活が可能になること」と述べている。田中（2000）は、異文化適応を「心身が健康で、社会的にも良好な状態で課題達成を遂げており、異文化性に基づく困難を乗り越えて異文化理解を果たしていること」と論じている。ここに挙げた3つの異文化適応の定義は、適応を調和のとれた好ましい状態として捉えており、異文化適応は静的なものであることを述べている。

これに対して、高井（1989）は、異文化適応を「ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程である」としている。高井（1989）によれば、個人が環境の変化のどの側面にどの程度順応できるか、また、どのような経過をたどって達成できるかが問題とされ、異文化適応を心理的な「過程」として捉えた。さらに、江淵（1991）は、異文化に適応していくことは、自

他調節の過程であると定義し、「(異文化の適応とは) 自己の内面的環境との闘いであり、自己挑戦、自己変革の過程」であると述べている。ここに挙げた2つの異文化適応の定義は、適応を過程として捉えており、異文化適応は動的なものであることを述べている。適応を状態や過程と見るかによって定義は異なっているが、これらの定義には個人が新しい環境に自分を合わせていくという点では研究者間で一致している。ただし、個人の内面的なものについては、研究者の間であまり触れられていないように思われる。

このように、異文化適応に関する定義が数多くなされてきたが、異文化適応の概念や捉え方についてはさまざまな議論があり、明らかな研究者間の合意は見られない。これを踏まえて、留学生の適応の研究を検討する際に、異文化適応の定義について注意することが必要であると考えられる。

適応に成功すれば、異文化適応といえる。逆に、適応に失敗すれば、異文化不適応になる。異文化への適応の困難さが原因となる不適応症状はカルチャー・ショックと呼ばれる。カルチャー・ショックは異文化における適応・不適応の問題を考えていくうえで、避けて通れない概念である。

カルチャー・ショック概念を最初に提起したのはOberg (1960) である。Oberg (1960) は「社会的な関わり合いに関するすべての慣れ親しんだサインやシンボルを失うことによって突然生じる不安」と定義し、そこに生じる不安な精神状態がカルチャー・ショックであるとしている。これに対して、Adler (1975) は、「病的」と見られがちなカルチャー・ショックも、それを新しい文化の学習と個人的人間的成長という広い視野の中で見ると、異文化理解だけでなく自己理解の深化とそれに基づく変容(成長)をもたらす学習経験と捉えることができることを明らかにした。

また、Furham & Bochner (1986) は、カルチャー・ショックを明確な心理的・物理的な報酬が全般的に不確実でコントロールや予測がしにくい状況におけるストレス反応であると捉えている。一方、Berry (1992) は、否定的な意

味合いのあるカルチャー・ショックという語の代わりに、文化的ストレスを使うことを提唱している。一般的にカルチャー・ショック論では「不適応」をイメージさせるネガティブな諸問題の面に注意が行きがちである。

カルチャー・ショックを乗り越えていく過程(プロセス)には、多くの人が共通して経験する過程が存在する。Kim (1988) は、この異文化滞在者の適応過程を「ストレス、適応、成長のプロセス」と捉えた。また、Oberg (1960) と Adler (1975) は、カルチャー・ショックという概念で異文化適応過程を段階に分けて整理した。さらに、よく知られているLysgaard (1955) の「U型カーブ」説とGullahorn & Gullahorn (1963) の「U字曲線」説では異文化適応を一つのプロセスとして捉えていた。これに対して、Church (1982) は、滞在地での異文化での適応の過程を「U字曲線」で表わし、帰国後の自文化での再適応曲線の「U字曲線」と合わせて、全行程の適応曲線「W字曲線」としてモデル化した。

異文化適応に見られるように、カルチャー・ショックはさまざまな困難を生じるものであり、誰でも、カルチャー・ショックを経験することになる。こうしたさまざまな困難に出会っても、留学生がそれをどのように受け止めるかを明白にすることは、異文化適応研究の一つの重要な視点であると考えられる。

以上の論考を要約すると、異文化適応とは「個人が異文化で心身ともに概ね健康で、強度な緊張やストレスにさらされていない状態」と定義することができよう。

## (2) 留学生の日常生活上の困難の実態

留学生の日常生活上の困難に焦点を当て、その実態を明らかにする研究が行われてきた(Table 1)。これらの研究は留学生の生活状況を把握しようとするのが目的であり、心理学的研究というよりも実態調査に近いものとなっている。

### ① 日常生活の困難とストレス

日本にいる留学生は、日常生活における悩みや困難として、日本語の困難、勉強面の困難、経済の困難の大きいことが報告されている(岡・深田, 1994; 田中・田畑, 1991; 上原,

1992; 徐・蔭山, 1994)。それ故, 在日留学生の心身の健康に関する研究が注目されるようになった。日常生活の問題点に焦点を当てているものが多い中, 姚・松原(1990)は, 病気や死亡, 言葉の問題, 現実生活に関する問題, 勉学上の問題, 人間関係や自分自身の問題, 環境の違いによる問題をストレス因子として報告し, この順でストレスが高かったと報告している。

また, 外国人留学生からの相談内容について, 松原・石隈(1993)は, 言語の問題, 経済の問題, 生活の問題, 健康の問題, 修学の問題, 人間関係の問題, 文化の問題の順で多かったことを述べている。

さらに村田(1994)は, 中国人留学生が「日本人との人間関係」「日本人の考え方・価値観」領域になれるまで最も時間を必要とすると報告した。

#### ②対人関係上の問題

在日留学生の健康と困難の問題が注目される中, 対人関係上の問題としていくつかの研究が行われている。対人関係上の困難として行動上の困難や問題点が挙げられた(田中・藤原, 1992)。また, 社会的困難度が高く, 葛藤経験として多く挙げられたものは自己主張であった(加賀美, 2003; 佐野, 1990)。さらに, 対人関係の困難に関する原因認知では, スキルの不足が原因であり, 対人関係にとってスキルの重要性が確認されたと説明している(田中, 1995, 2003)。

#### ③対日態度・日本人イメージ

留学生の日本・日本人に対する認知の変化に焦点をおく研究として, 対日態度・日本人イメージ研究が行われてきた。これらの研究の結果を要約すると, 日本・日本人に対する態度では, アジア系学生が批判的な態度を有していること, 日本人イメージでは, 日本語がよりできる者ほど日本人の「親和性」を低く評価する傾向があることが明らかにされ, 対人関係と直接に関わっている側面ほど不適応の原因になりがちであることが判明した(岩男・萩原, 1988)。

以上のことから, 在日留学生には, 言葉, 経済, 対人関係などさまざまな領域で困難な問題を抱えていることが明らかになった。その中, 留学生の困難な問題として対人関係面の問題が

多く取り上げられていることがわかる。このことから, 在日留学生には, 人間関係の問題が, 困難として強く認識されていることが明らかである。それ故, 対人関係によるストレスは極めて大きいと考えられる。

#### (3) 異文化適応指標

既に述べたように, 在日留学生の適応を検討する際に, 「異文化適応の定義」について留意は必要であるが, もう1つの留意点は異文化適応の測定指標である。高井(1989)は, 異文化適応について研究間の結果の一貫性がないことの原因は適応の測定指標のバラつきであると指摘している。

留学生の異文化適応研究ではさまざまな適応尺度が使用されている。そこで, 異文化適応を実証的に検討する際に, それぞれの研究に何をもって適応とみなすか, 何らかの指標をあらかじめ提示する必要であると考えられる。Table 2は在日留学生の適応研究を取り上げ, それぞれが扱っている留学生の適応の指標を挙げたものである。Table 2が示しているように, 在日留学生の適応研究では, さまざまな領域から適応を測定していることがわかる。具体的には適応を, 留学生の心身の健康などの心理的適応側面の研究(たとえば吉, 1999; 周, 1994), その一方, 心身の健康に加えて学習・研究, 日本文化などの社会文化的適応側面をあわせた研究(たとえば岩崎, 1998; 水野・石隈, 1998)もある。多くの研究では, 日本文化, 研究, 生活, 対人関係領域を取り上げている(たとえば田中・高井・神山・村中・藤原, 1990; 佐藤, 1996; 水野・石隈, 1998)。

このように, 各研究は異なった適応の指標を使用しているが, これらの研究において, 学業の側面と並んで, 対人関係における適応を測定しているものも多いことがわかる。

#### 3. 留学生の異文化適応に影響する要因の研究

これまで, 異文化適応に関連する要因にはさまざまなものが挙げられており, 先行研究の知見は必ずしも一貫していない(高井, 1989; 山崎, 1996)。そこで, 本論文では, 留学生の異文化適応に影響する要因に関する先行研究を概観し, 先行研究の知見を整理することを目指し

たい。以下では、在日留学生の適応に与える諸要因についてそれぞれ取り上げる (Table 3)。

### (1) 属性的要因

留学生の適応を検討する際、留学生の属性的要因について知ることが不可欠であろう。多くの研究では、滞在期間と日本語能力を属性的要因として取り上げている。滞在期間が長く、日本語能力が高いと適応が促進されるという結果が示されている (佐藤, 1996)。しかし、湯 (2004) は、滞在期間は異文化適応に直接の影響がなかったと報告している。さらに、岩崎 (1998) は、留学生活への適応に対しては、日本語能力と外国での滞在経験が負の関係をもっていることを明らかにした。このように、研究によって、異なった結果が見出されている。

また、属性的要因としてパーソナリティ特性 (孫, 2009)、個人属性 (佐藤, 1996; 葛, 2003a)、生活環境属性 (佐藤, 1996)、異文化での生活への準備属性要因 (佐野, 1990) も適応に影響を与えることが明らかにされた。

### (2) 対人的要因

既に述べたように、多くの研究では、留学生の異文化適応問題として対人関係上の困難が多く取り上げられている (Table 1 参照)。このため、対人的要因が留学生の適応に及ぼす影響についてさまざまな研究がなされていた。

対人的要因として、最近サポートに関する研究が盛んになり、特にサポートと適応の関連についての研究が著しい。多くの研究ではサポートと適応には、一定の関連が認められ、サポートは適応に効果的であるといえる (樋口, 1997; Tanaka, Takai & Kohyama et al, 1997)。しかしながら、サポートは次元によっては、適応との関連が認められない場合がある (Jou & Fukuda, 1995a)。加えて、周 (1994) は、受け取ったサポートと適応の関連を調べた結果、来日後1年9ヶ月では、両者の関連がないと報告している。さらに、山本 (1986) は、援助領域によりその効果が異なっていたと述べている。

また、社会的スキル (早矢仕, 1997; 湯, 2004)、ソーシャル・ネットワークの形成 (田中・高井・南・藤原, 1990a)、被援助志向性 (水野・石隈, 1998)、社交性 (岩崎, 1998)、行動面における文化受容 (中島, 2003)、友人

関係場面 (佐野, 1990) などの対人的要因も適応に影響を及ぼしていることがわかった。

### (3) 動機づけ要因

これまで、在日留学生の異文化適応の研究では、留学生の言語面、行動面に焦点を当てた研究が多い中、留学生の心理的側面に関しては、少数であるが、いくつかの研究がなされていた。たとえば、吉 (1999) は、就学生を対象に調査した結果、学習態度・意欲が心身の健康度に影響を与えると報告している。また、留学の動機に焦点を当て、田畑・田中 (1991) は、日本に直接関連した来日動機があるものほど、留学生活への満足度が高く、受動的な動機で来日したもののほど、日本での生活に馴染みにくいことを述べた。葛 (1999) も田畑・田中 (1991) と同じ結果を見出した。この結果から、留学生の適応に対して動機づけの影響が大きいことが示唆されているといえる。

### (4) 自己概念

自己概念要因として、自己主張、自尊感情が適応に影響を与えることが報告されている (岩崎, 1998; 佐野, 1990)。

### (5) 文化的要因

異文化での適応を検討する際に、文化的要因による影響が大きい。佐野 (1990) は、文化の異なる場合 (日本語の使用や文化の共通性の少なさ) ほど社会的困難度は高いと報告している。また、「日本文化への積極性」の適応感に対する説明力が見出された (早矢仕, 1997)。さらに、文化受容態度と文化適応度も適応に影響していることが示された (湯, 2004; 井上・伊藤, 1998)。

### (6) 自己の能力に関する認知

留学生の適応には、留学生自身の自己認知や自・他文化に対する態度などの要因も大きく関わっているという指摘がある。自己効力感が適応に影響しているという結果が見出されている (早矢仕, 1997; 孫, 2009)。さらに、自国自文化肯定意識が適応感に対する直接的な影響は大きくなかったが、「自己効力感」を介しての間接的な影響が示された (早矢仕, 1997)。

## 4. 考察および今後の研究の課題

次に、上記の要因の整理に従って、留学生の

適応を促進するために重要となる観点について提示したい。

第1に、留学生の適応指標は研究によって異なり、研究結果の解釈や知見の一般化を困難にしている。既に述べたように、在日留学生の適応研究では、さまざまな領域から適応を測定している。たとえば、孤独感やwell-beingなどの精神的健康の指標を用いている研究がある。その一方で、心身の健康に加えて、学業、生活などの社会文化的適応を合わせて異文化適応の指標とした研究もある。後者のように、社会文化的適応の側面を入れて異文化適応について検討することは、利点も多いが、学業面の適応と心身の健康の関係、対人関係面の適応と精神的健康などの関係を把握することができないという欠点もある。このことから考えると、精神的健康と学業、生活などの社会文化的適応を区別して検討する方が好ましいと考えられる。

第2に、理論的な背景に基づく研究が不十分である。従来の異文化適応研究では、異文化適応にかかわるさまざまな個人要素と環境要因がばらばらに検討されている。たとえば、日本語能力、パーソナリティ特性、ソーシャル・サポートなどの影響が考察されている。しかし、欧米における異文化適応に関する研究を比べると、在日留学生の異文化適応研究においては、理論的な背景に基づく研究が少なく、まだ検討されていない影響関係があると考えられる。たとえば、動機づけ要因が十分に考慮されていない。Chirkov, Vansteenkise, Tao & Lynch (2007) は、カナダにいる中国人留学生を対象にして、留学動機づけが適応に関連する結果を示しているが、日本では、動機づけと適応の関係を検討したものは見当たらない。異文化適応とは、留学生自身が異文化環境に対して積極的に向き合うことで、形成、維持されていくものであると考えられる。留学生自身の動機づけは、異文化環境への向き合いが生じる背後に想定される概念であり、異文化環境との向き合いの起点となるものであるが、こういった根本的な要因の検討は極めて必要であろう。最近、高校生や大学生を対象とした多くの研究（たとえば、永作・新井, 2003; 岡田, 2005）が動機づけと適応との間に関連があることを示している

が、留学生を対象にして、動機づけの観点から適応に及ぼす影響について検討した研究は極めて少ない。留学生の動機づけを扱った田畑・田中(1991)の研究では、留学生の適応に対して動機づけの影響が大きいことが示唆されているが、留学生の適応指標を扱っておらず、また理論的な背景はない。このことから、留学生の動機に関する研究のさらなる検討が必要と考えられる。

また、既に述べたように、留学生の異文化適応にとって対人関係が重要な役割を果たすことが示唆されており、対人関係がうまくやっていたら、適応が促進されることが明らかにされている。それではなぜ対人関係が円滑であるほど適応が促進されるのであろうか。いままでの研究では、この点について理論的に十分な検討がされていないと考えられる。たとえば、対人関係と異文化適応の関係を説明する際、信頼感が重要な要素となるかもしれない。信頼感によって人は他者と感情的に肯定的に関係づけられ、あらゆる人間関係に肯定的な影響を与えるとされてきた (Johnson & Swap, 1982; Rotter, 1980)。さらに、自分自身や他者に対する信頼感をもつ人は、対人関係上の悩みが少ないこと、他者からの効果的なソーシャル・サポートを受けられることが報告されている (Grace & Schill, 1986)。また、天貝 (2001) は、安定した信頼感をもつことは、人が他者をより支持的であると感じることにつながることや、対人的な親密性や個人の精神的健康と関連することを実証的に示している。このように、対人信頼感は留学生の心理的適応にとっても重要であると考えられるが、日本において異文化適応との関連を実証的に扱った研究は存在しない。対人信頼感に焦点を当て、留学生の対人信頼感と適応の関連について検討し、留学生の適応援助への新たな視点を提供できると考えられる。

第3に、在日留学生の異文化適応に関する心理的プロセスの検討が不十分である。これまで異文化適応に及ぼす要因の研究では、ほとんどの研究が説明変数 (e.g., 日本語能力, 滞在期間) と目的変数 (e.g., 適応状態) の二者間での直接的な関係を測っており、異文化適応に関する心理的プロセスについて、いまだ解明されていない

いところが多い。たとえば、説明変数と目的変数の間に存在する媒介変数の検討、多要因間の因果関係、多要因と適応との因果関係モデルの検討は少ない。この点を考えると、留学生の異文化適応を検討する際には、ある程度さまざまな要因を統制して異文化適応との関連をより詳細に検討することが必要であろう。

第4に、調査方法の問題がある。たとえば、調査方法の問題として、留学生の出身地域の分類が必要である。田中・高井・神山・村中・藤原(1990)も指摘するように、研究対象の出身地域が違っていると、得られる結果が大きく異なる。さらに、葛(2007)も、異文化適応を検討する場合は、研究対象の出身国の限定が必要であると指摘している。なぜなら、留学生の適応研究を行う際に、すべての留学生を対象にするのではなく、一国の留学生に限定した研究であれば、文化的要因をコントロールすることができると思われるからである。いままで、日本では、出身国の違いが留学生の適応に及ぼす影響についてあまり検討されてこなかった。その中でも特に、在日留学生の半数以上を占めている中国人留學生だけを対象とした研究は少ない。岡・深田・周(1996)は留学目的と適応についての研究では、中国人留學生は、交流領域は他の領域(言語領域、勉学領域と文化体験領域)と比べ、満足度が低いことを明らかにした。また、葛(2007)は、中国人留學生は、他の国の留學生と比べて、不適応(たとえば、対人関係において)であることを見出している。これらを踏まえると、中国人留學生の日本への適応に及ぼす要因を明らかにすることは極めて重要な課題であるといえる。さらに、中国からの留學生は、今後さらに増加する傾向にあるため、中国人留學生の日本での適応に関する研究は現実な問題にも意義深い。

調査方法上のもう一つの問題は研究方法である。留学生の適応に関連する研究を概観すると横断的研究が多いことがわかる。しかし、留學生は異文化に適応していく過程に基づくプロセスを解明するには、縦断方法が適切であるとされている(Furnham & Bochner, 1986)。欧米では、さまざまな縦断的な研究が行われてきた(たとえばLysgaard, 1955; Gullahorn &

Gullahorn, 1963)。葛(2007)は、これらの研究では異文化への適応や異国の生活に対する満足度は、異文化の中での生活期間が長くなるのに応じて単調に増加するのではなく、変動しながら進行すること、また適応の側面によって進行状況が異なってくることは共通な認識となってきたと述べている。それでは、在日留學生が日本で生活している間にどのような適応過程が見られるか、また適応に影響する要因と適応過程の関連などを縦断的に研究する必要があると考えられる。欧米と比較して、日本での留學生適応研究では縦断研究がはるかに少ない(高井, 1989)。実際には、縦断研究の実施の難しさ、また追跡調査の困難さが指摘されており(山崎, 1996)、そういった問題が縦断的研究が不足している原因の1つであると考えられる。その意味ではこの点の厳密な解決は不可能であるが、よりよい方法として、たとえば、長期滞在者に自分がどう適応してきたかという適応プロセスについて回想法によるインタビューなどの縦断研究が考えられよう。

## 5. まとめ

以上、留学生の適応を促進するために重要となる観点について提示した。これらの観点は、留学生の適応研究を行う際に、留学生の適応を促進し、効果的に適応援助を行うことに役に立つと考えられる。高井(1989)は、日本では外国人留學生についての心理的研究は比較的少ないと報告している。確かに、これまで、在日留學生全体の異文化適応の研究では、留學生の言語面、行動面に焦点を当てたものが多く、留學生の心理的側面について、適応との関連を検討した研究は少ない。そのために、これからの研究においては、本論文に提示したように、心理的側面要因として動機づけ要因と信頼感要因も取り上げることにより、これらが留學生の心理的適応にどのように影響を与えているか、またどのように留學生の適応援助に効果的なのかについて、研究を進めていくことによってより具体的に有効な示唆が得られると考えられる。

Table 1 適応に関する実態調査

健康と困難の問題	研究者	対象者	手続き	方法	主な結果 <sup>注1</sup>
1 日常生活の困難とストレス					
1) 悩んでいる問題	田中・田畑 (1991)	留学生 (N=151) (東アジア74人 (50.3), 東南アジア・南アジア49 人 (30.3), 西欧10人 (6.8), 中南米6人 (4.1), 中東・アフリカ8 人 (5.4))	質問紙	横断	現在の悩みについて, 「勉強」「日本語」 「偏見」「経済状態」の順で多かった。
	上原 (1992)	留学生 1, 2回目 (N=32) 3回目 (N=25)	質問紙	横断	最も困っている問題として, 第1回目の 調査から第3回目まで首位は日本語である。
	岡・深田 (1994)	中国人留学生と 就学生 (N=375)	質問紙	横断	現在最も悩んでいる問題として, 就職・ 進路の問題, 勉学上の問題とビザの問題 であった。
	徐・蔭山 (1994)	中国人留学生 (N=565)	質問紙	横断	日本生活での悩みについて, 「孤独で退 屈」「将来に対する不安」「経済問題」の 順で高かった。
2) 日常生活の困難	田中・田畑 (1991)	中国人留学生 (N=151)	質問紙	横断	日本語の困難, 勉強面の困難, 文化習慣 の違いに基づく生活上の困難の大きい ことが確認された。
	岡 (1992)	中国人留学生 (N=86)	質問紙	横断	交流領域での満足度が低く, 「大学には なんでも話せる日本人がいない」「日本 へ来てから寂しくなることがよくある」 という回答は留学生活への不適応を示し ている。
3) 適応に要する 時間	村田 (1994)	中国人留学生 (N=126)	質問紙	横断	中国人留学生が「日本人との人間関係」 「日本人の考え方・価値観」領域になれる まで最も時間を必要とする。
4) 外国人留学生 相談の実態	松原・石隈 (1993)	22大学39ヶ所 からの留学生	質問紙	横断	相談内容については言語の問題, 経済の 問題, 生活の問題, 健康の問題, 修学 の問題, 人間関係の問題, 文化の問題の順 で多かった。
5) ストレス	田中・横田 (1992)	留学生 (N=275) (中国101人, 東南アジ ア65人, 韓国31人, 台 湾23人, 欧米とオセア ニア26人, 中南米20人, 中東とアフリカ7人, 不 明2名)	質問紙	横断	居住形態に共通してストレスの高い項目 は, 「日本人学生との親密化」「日本語の 曖昧さ」などがある。
	姚・松原 (1990)	留学生 (N=192) (中国が香港を含め55名 (28.6), 中華民国(台 湾)が44名 (22.9%), 韓 国が28名, (14.6%)。そ の他は, 北米5名, 中南 米5名, ヨーロッパ6名, オセアニア5名, 中近東 とアフリカ2名, 無回答 者6名) 日本人学生 (N=163)	質問紙 自由 記述	横断	ストレスに関しては, 病気や死亡, 言葉 の問題, 現実生活に関する問題, 勉学上 の問題, 人間関係や自分自身の問題, 環 境の違いによる問題はこの順で高かつ た。
2 対人関係上の問題					
6) 対人関係上の 困難	佐野 (1990)	留学生 (N=50) (中国22名, 韓国/台湾 18名, 非漢字圏10名)	質問紙	横断	社会的困難度が正当場面, 自己主張, 友 人関係, 日常生活の順に高い (自己主張 と友人関係は同位であった) ことを示し ている。困難度の高い項目は精神的に緊 張する場面と深いレベルのコミュニケー ションが必要とする場面が占めている。

	田中・藤原 (1992)	留学生 調査1：(N=24) (漢字圏5人, 東南アジア7人, 西欧2人, 中南米6人, 中東2人, アフリカ2人) 調査2：(N=102) (漢字圏52人, 東南アジア26人, 西欧13人, 中南米7人, 中東・アフリカ4人)	調査1： 記述式 質問紙 と面接 調査 調査2： 質問紙	横断	調査1：行動上の困難として、日本人の行動で、理解したり、同様に行ったりするのが難しいものと外国人としての彼らの行動で、日本で誤解されたり、理解されにくかったりしてすれ違いを起こしたものが挙げられた。 調査2：もっとも多くあげられた行動の困難や問題点として表現の間接性を使用こなすことであった。
7) 対人葛藤	加賀美 (2003)	外国人学生 (N=43) (中国11名, 韓国7名, アメリカ5名, エジプト4名, マレーシア2名, それ以外の11カ国は各1名) 日本語教師 (N=84)	質問紙	横断	葛藤内容の最も多かったのは学生の抗議・自己主張であった。
8) 対人関係の困難に関する原因認知	田中 (1995)	留学生 (N=268) (東アジア141人, 東南・南アジア80人, 西欧12人, 中南米12人, 中東・アフリカ15人)	質問紙	横断	対人関係の困難に関する原因認知の1位は文化特定のスキルの欠損であった。
	田中 (2003)	日本人学生 (N=116) 留学生 (N=268) (東アジア54.2%, 東南・南アジア30.3%, 西欧4.5%, 中南米4.6%, 中東・アフリカ5.8%)	質問紙 自由 記述	横断	原因認知の評定について、日本人学生では、日本人の語学力不足への帰属、日本人の多忙などが高かった。留学生では、日本人のスキルの不足、社会知識の不足などが高かった。
3 対日態度・日本人イメージ					
	岩男・萩原 (1988)	留学生 (N=1296)	質問紙	横断	アジア系学生が、生活状況と留学生に対する日本人の態度を低く評価している／日本語がよりできる者ほど日本人の「親和性」を低く評価する傾向がある／対人関係と直接に関わっている側面ほど不適応の原因になりがちである／アジア学生が批判的な態度を有している。
	山崎 (1993)	アジア留学生 (N=163) (中華人民共和国66名, 韓国と台湾が同数の20名, 他にはマレーシア, タイ, インドネシア, シンガポール, 香港, ベトナム, ラオスからの出身者が含まれていた)	質問紙	横断	親和的イメージは滞在4年頃に最も評価が厳しい。
	山崎 (1996)	アジア留学生 (N=163) (中華人民共和国66名, 韓国と台湾が同数の20名, 他にはマレーシア, タイ, インドネシア, シンガポール, 香港, ベトナム, ラオスからの出身者が含まれていた) 就学生 (N=134) (韓国52名, 中華人民共和国50名, 台湾19名であり, その他タイ, フィリピン, 香港, ミャンマー, スリランカ, ネパールからの出身者が含まれていた)	質問紙	横断	日本人イメージは留学生, 就学生ともにやや低い, 特に親和性イメージは低いことが見出された。
	横林 (2001)	日本人学生 (N=213) 留学生 (N=51)	質問紙	横断	日本に対する態度では、全体的に大規模校の留学生は否定的評価を下している。日本人に対する態度では、「信頼性」について大規模校の留学生は低い。

注1：主な結果は、各研究で検討された結果について要約した。

Table 2 異文化適応指標

研究者	用いた尺度	下位尺度	信頼性
山本 (1986)	適応尺度 (FSA) (Baker (1981) のもの使用)	研究領域/人間関係領域/情緒領域	記述なし
佐野 (1990)	異文化社会への適応尺度 <sup>注2</sup> (複数の尺度を使用) 1. 社会的困難度 (Furnham & Bochner (1981) を参考に して、日本の状況に合わせて作成) 2. 適応の度合い尺度	正式場面/自己主張/友人関係/日常生活  身体の調子/心理的安定度/勉強意欲/ 日本での生活に対する満足度	記述なし
田中・高井・神山・ 村中・藤原 (1990)	異文化適応尺度 <sup>注2</sup> (複数の尺度を使用) 1. ストレス評価 (モイヤー (1987) をもとに作成) 2. 異文化への適応評価 (山本 (1986) の留学生活における適応 尺度のものを参考にした) 3. 孤独感 (藤原・来島・神山・黒川 (1987) が UCLA 孤独感尺度から選出した) 4. 対人志向性評価 (佐藤・長田・矢富・岡本・巻田・林・ 井上 (1989) の知見を参考に独自 に作成) 5. 不適応症状 6. ストレス対処 (姚・松原 (1990) と広沢 (1985) を 参考にした) 7. ソーシャル・スキル	対人ストレス/日常生活しストレス  日本語文化/研究/健康・人間関係  心身の不適応/満足感  セルフ・コントロール型対処/依存型対処	記述なし
田中・高井・南・ 藤原 (1990b)	ADQ (Adaptation Questionnaire) (田中他 (1990) のものを選択し使用)	日本の留学生活の満足度/来日前と比較した 健康状態の変化/不適応症状/孤独感/ ストレス/ストレスへの対処/学習成果と 心身の健康の評価/海外の人の連絡回数	記述なし
田中・高井・南・ 藤原 (1990b)	ADQ II (Adaptation Questionnaire II) (田中他 (1990a) のもの一部改訂)	適応状態/日本語能力/ソーシャル・スキル/ 対人志向性/海外との連絡回数/ 留学生の満足感/不適応症状/来日前と比 較した健康状態の変化/適応状態の評価/ ストレス/ストレスへの対処	記述なし
上原 (1992)	適応尺度 (Baker (1981) のものを改善使用)	学習・研究/心身健康・情緒/対人関係/ 文化/住みごこち・経済	記述なし
周 (1994)	心身の健康 <sup>注2</sup> (複数の尺度を使用) 1. 心身の自覚症状 (KMIから精神的自覚症状, 身体的自覚 症状の項目を選び出し, 表現を修正して 使用した) 2. ハッピーネス (植田・吉森・有倉 (1992) のものを使用)	精神的自覚症状/身体的自覚症状	$a = .91 /$ $a = .89$  $a = .82$
周 (1995)	適応尺度 <sup>注2</sup> (Baker (1981) と上原 (1988) の項目 から選定し, 一部修正を加えて使用)	研究領域/人間関係領域/ 情緒領域/環境・文化領域	$a = .88 \sim .90$
岡・深田・周 (1996)	適応度 (上原 (1988) の適応尺度から項目を抽 出し使用)	勉学領域/交流領域/情緒領域/環境領域	記述なし
佐藤 (1996)	適応尺度 (佐藤 (1995) のものを使用。なお佐藤 (1995) のものはBaker (1981) のもの を参考し, 独自作成したもの)	学習・研究の進展に関する精神面の状態/ 学習・研究における指導・対人関係/ 経済的側面/学生生活/身体面の健康/ 生活環境/大学の支援体制	記述なし
早矢仕 (1997)	適応感尺度 (山本 (1986) と上原 (1988) のものか ら選定し使用)	学校・学習適応領域/対人関係適応領域/ 文化・言語適応領域/住み心地領域/ 情緒・身体的状態の領域	$a = .77$

## 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望

樋口 (1997)	日本生活への適応感 (予備審査の結果および留学生の異文化 適応に関する過去の研究結果(綾部・小 野沢, 1979)を参考に状況を特定しない 形式で項目作成),		$a = .78$
井上・伊藤 (1997)	精神健康尺度 SCL-90-R (Derogatis (1983) のもの使用)	身体化/強迫症状/対人敏感性/ 抑鬱症状/不安/敵意/恐怖症状/ 妄想観念/精神病質	$a > .95$
岩崎 (1998)	留学生の適応尺度 <sup>注2</sup> 1. 留学生生活への適応 (岩男・荻原(1988)とSingh(1963)の ものから項目を選定し, 作成) 2. 孤独感 (Rusell, Peplau & Cutrona (1980) が作 成した改訂版UCLA孤独感尺度及びその 邦訳を尺度として使用)	日本人の外国人観(日本人の偏見)/ 留学生生活の満足度/留学環境の認知	記述なし
水野・石隈 (1998)	適応尺度 (Baker et al. (1985,1986)のものを参考に, 上原(1992)のものを使用) 留学生用学習・研究尺度 留学生用心身健康尺度 留学生用対人関係尺度 留学生用日本文化尺度 留学生用住居・経済尺度	学習能力・動機要因/学習満足要因 心身・健康要因 日本人関係要因/教職員関係要因 日本文化尺度 住居・生活要因/経済要因	$a = .75 \sim .88$
水野・石隈 (2001a)	適応尺度 (水野・石隈(1998)のものから4つの尺 度を使用) 留学生用学習・研究適応尺度 留学生用心身健康適応尺度 留学生用対人関係適応尺度 留学生用住居・経済適応尺度	学習・研究要因 心身健康要因 対人関係要因 住居・経済要因	$a = .71 \sim .86$
吉 (1999)	心身健康尺度 (YG性格検査, CMI, MPI性格検査の項 目から選定し採用)	心身健康/身体健康/精神健康	記述なし
吉 (2001)	適応感尺度 (鈴木(1995)のものを使用し, 文章表 現に調整した)	情緒安定/自己肯定感/学校肯定感・学業	記述なし
葛 (2003)	適応尺度 (Hosseindoust (1975)のもの使用, さらに, 項目追加)	精神的健康/対日感情/対人関係	$a = .63 \sim .86$
中島 (2003)	対人コミュニケーション満足尺度 (Hecht (1978)のものを使用)	満足/無意味性	$a = .62 \sim .91$
湯 (2004)	在日中国人留学生用の異文化適応尺度 (複数の尺度を使用) 1. 異文化適応度 (上原(1992)のものを参 考に作成) 2. 主観的幸福感 (伊藤・相良・池田・川浦 (2003)のものを使用)	学習・研究/心身の健康/対人関係/ 住居・経済/文化	$a = .81$ 記述なし
植松 (2004)	異文化適応感尺度 (山本(1986)と早矢仕(1997)を参考 に作成)	滞在国の言語・知識/心身の健康/ 学生生活/ホスト親和	$a = .59 \sim .89$
宋・石川・神庭・ 池澤・渡邊・渡辺 (2006)	留学生のストレス尺度 (松原(1991)と周・深田(2002)の尺 度を基に, 田中・横田(1992)や井上 (2001)のものを加味して作成)	学生生活ストレス/生活環境 ストレス/親密な人間関係 ストレス	$a = .78 \sim .84$
宋他 (2006)	学生ストレス反応尺度 (村上・桂(1988)ものを基に一部修正 し使用)	情緒的ストレス反応/筋骨格系 ストレス反応/自律神経系 ストレス反応/認知的 ストレス反応	記述なし
孫 (2009)	異文化適応尺度 (複数の尺度を使用) 1. 社会的文化適応 (独自に作成) 2. 心理的適応 (Spielber (1970)による状態・特性不安 検査の状態不安の中国語版を使用)	学校領域/アルバイト領域/ 日常生活領域/日本社会 不安	記述なし

注2: 尺度名については著者がはっきり述べていないが, 筆者の判断でつけた。

Table 3 留学生の異文化適応に影響する要因の研究

要因	研究者	対象者	主な結果 <sup>注3</sup>
1 属性的要因			
1) 個人属性	佐藤 (1996)	留学生 (N=342) (中国: 33%, 韓国: 20.5%, 東南アジア18.7%)	出身国・地域の属性が「経済生活」「学生生活」「身体面の健康」「生活環境」適応領域と関連している。
	葛 (2003a)	アジア留学生 (N=149) (中国人留学生96名, 台湾19人, 韓国14人, 東南アジア20人)	専攻, 子どもの有無, 年齢の個人属性が中国人留学生の適応度に影響を与える。
2) 滞在期間	佐野 (1990)	留学生 (N=50) (中国22名, 韓国/台湾18名, 非漢字圏10名)	滞在期間は日常生活の困難度の軽減と関係が見出された。
	佐藤 (1996)	留学生 (N=342) (中国: 33%, 韓国: 20.5%, 東南アジア18.7%)	日本滞在期間は「指導・対人関係」領域で適応と関連している。
	湯 (2004)	中国人留学生 (N=91)	滞在期間は異文化適応に直接的な影響がなかった。
3) 日本語能力	佐藤 (1996)	留学生 (N=342) (中国: 33%, 韓国: 20.5%, 東南アジア18.7%)	日本語能力, 日本語能力評価は「学生生活」の領域での適応と関連している。
	樋口 (1997)	留学生 (N=62) (アメリカ16人, オーストラリア14人, 中国9人, ベルギー4人, カナダ3人, イギリス3人, 韓国3人, タイ3人, インドネシア2人, 台湾2人, 香港2人, シンガポール1人, ベトナム1人)	語学力と適応感と強い関係をもっている。
	岩崎 (1998)	留学生 (N=257) (韓国74名, 中国38名, 台湾25名, アジア留学生188人)	日本語能力が「留学生活への適応」と負の関係であった。
	葛 (2003a)	アジア留学生 (N=149) (中国人留学生96名, 台湾19人, 韓国14人, 東南アジア20人)	日本語能力の個人属性が中国人留学生の適応度に影響を与える。
	湯 (2004)	中国人留学生 (N=91)	日本語能力は, 適応と有意差が見られた。
	岩崎 (1998)	留学生 (N=257) (韓国74名, 中国38名, 台湾25名, アジア留学生188人)	外国での滞在経験が「留学生活への適応」と負の関係であった。
4) 外国での滞在経験	佐藤 (1996)	留学生 (N=342) (中国: 33%, 韓国: 20.5%, 東南アジア18.7%)	日本人との交流の程度の属性が「指導・対人関係」「学習・研究の進展」「学生生活」と「大学の支援体制」適応領域と関連している。奨学金の受給の属性が「経済生活」適応領域と関連している。
	葛 (2003a)	アジア留学生 (N=149) (中国人留学生96名, 台湾19人, 韓国14人, 東南アジア20人)	奨学金の有無の個人属性が中国人留学生の適応度に影響を与える。
5) 生活環境属性	佐野 (1990)	留学生 (N=50) (中国22名, 韓国/台湾18名, 非漢字圏10名)	異文化での生活の準備 (とりわけ, 日本語の学習) が, 適応の困難度を軽減することを示した。
6) 異文化での生活への準備	孫 (2009)	中国人留学生 (N=182)	損害回避, 新奇性追求, 固執, 自己志向性, 協調性が社会文化的適応, 損害回避, 新奇性追求, 自己志向性, 協調性が不安と有意な関連があった。
	孫 (2009)	中国人留学生 (N=182)	損害回避, 新奇性追求, 固執, 自己志向性, 協調性が社会文化的適応, 損害回避, 新奇性追求, 自己志向性, 協調性が不安と有意な関連があった。
2 対人的要因			
8) スキル	早矢仕 (1997)	就学生 (N=292) (中国出身150人, 韓国89人, 台湾53人)	中国人留学生において, 現在社会的スキルが適応感に大きく影響していない。自国での社会的スキルが適応感に影響している。
	湯 (2004)	中国人留学生 (N=91)	社会的スキル (現在) と主観的幸福感: 弱い正

## 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望

- 9) サポート
- 山本 (1986) 留学生 (N=25)  
(台湾が8名, 中国と韓国が5名ずつ, ブラジルとスリランカ2名ずつ, アフリカとアメリカ合衆国とインドが1名ずつ)
- 周 (1994) 中国人留学生 (N=175)
- 周 (1995) 台湾出身の留学生 (N=33)
- Jou & Fukuda (1995a) 中国人留学生 (N=92)
- Jou & Fukuda (1995b) 中国人留学生 (N=64)
- 樋口 (1997) 留学生 (N=62)  
(アメリカ16人, オーストラリア14人, 中国9人, ベルギー4人, カナダ3人, イギリス3人, 韓国3人, タイ3人, インドネシア2人, 台湾2人, 香港2人, シンガポール1人, ベトナム1人)
- Tanaka, Takai & Kohyama et al (1997) 留学生 (N=221)
- 水野・石隈 (2001a) アジア留学生 (N=264)  
(韓国59名, 中国159名, 台湾46名)
- 宋・石川・神庭・池澤・渡邊・渡辺 (2006) 中国系留学生 (N = 161)
- 10) 被援助志向性
- 水野・石隈 (1998) 留学生 (N=239)  
(韓国95名, 中国88名, 台湾56名)  
日本人学生 (N=135)
- 11) 対ホスト国イメージ
- 葛 (2003 b) 中国人学生  
(1回目: 240名; 2回目: 43名)  
日本人学生  
(1回目: 169名; 2回目: 54名)
- 各領域の援助と適応の関連は, 研究領域では指導教官や学外の日本人から援助が多いほど, 不適応であった。人間関係や情緒の領域では, 留学生や指導教官から援助が多いほど, また情緒領域では留学生から援助が多いほどその領域において適応得点が高かった。
- ストレスと心身の健康, サポートとハッピーネス: 正, ストレッサーとハッピーネス, サポートと心身の健康: ns
- 同じ時期に受け取ったサポートと適応の間には, 時期1(来日3ヶ月後)と時期2(来日9ヶ月後)では, 有意な正の相関関係が見られ, サポートを多く受け取っているほど適応度が良くなることが示されたが, 時期3(来日後1年9ヶ月)では, 両者の相関は有意でなく, サポートを受け取った量と適応度の間に関連がないことが示された。
- 実行されたサポートと適応は正の相関, 知覚されたサポートと適応に有意な関連は認められず, 必要とされたサポートは適応と負の相関が確認された。サポートの三次元を予測変数, 適応を基準変数として重回帰分析が実施され, 実行とされたサポートと必要とされたサポートが適応に有意な関連が認められた。
- 相関分析では, 日本人教官から実行されたサポートと適応は正の相関であったが, 他の3つのサポート源からのサポートとの関連は認められなかった。適応尺度を従属変数とする重回帰分析でも同様の結果が認められた。
- 友人からのサポートと適応感と強い関係をもっている。
- 一般的な適応因子では, 「ネットワークとの接触頻度」, 「日本人メンバーの割合」, 「関係の公正さ」, セルフ・コントロール型適応因子では, 「接触の頻度」, 「勉強のサポート」, 親和的適応因子では「勉強のサポート」, 依存型適応因子は「関係の満足度」, 「勉強のサポート」からの影響が確認された。
- 役割的ヘルパーおよびボランティアヘルパーからのソーシャル・サポートH群の留学生が学習・研究領域の適応得点が高い。ボランティアヘルパーからのソーシャル・サポートH群の留学生が対人関係領域の適応得点が高い。専門的ヘルパー, 役割的ヘルパー, ボランティアヘルパーのすべてのヘルパーからのサポートの程度と適応の関連が認められた。
- 「日本にいる同国の人」サポートが情緒的ストレスと自律神経系ストレス反応: 正
- 学習・研究, 心身の健康, 対人関係, 住居・生活のすべての領域で留学生の問題解決志向性(自分で問題を解決傾向)が有意に高い。専門的ヘルパー, 役割ヘルパーとあった項目は, 学習満足要因, 住居・生活要因, 経済要因である。
- 中国人学生では, 留学後の日本人の「親和性」に関するイメージは「対日感情」と「対人関係」, 「勤勉性」に関するイメージは「対日感情」, 「対人関係」および「日本語力」, 「先進性」に関するイメージは「精神的健康」と「対人感情」との間に相関が見られた。

- |                            |                                   |  |  |
|----------------------------|-----------------------------------|--|--|
| 12) 友人関係<br>場面             | 佐野<br>(1990)                      | 留学生 (N=50)<br>(中国22名, 韓国/台湾18名, 非漢<br>字圏10名)   | 友人関係場面と全般的な適応の度合いとの関連が高<br>かった。          |
| 13) ソーシャル<br>ネットワー<br>クの形成 | 田中・<br>高井・<br>南・<br>藤原<br>(1990a) | 留学生 (N=18)<br>(インドネシア5名, 台湾4名, マ<br>レーシア・フィリピン・ベトナム・<br>パキスタン・トルコ・メキシコ・ペ<br>ルー・ブラジル・スペイン各1名)   | ネットワーク形成は適応との関係が認められた。                   |
| 14) 行動面に<br>おける<br>文化受容    | 中島<br>(2003)                      | 留学生 (N=80)<br>(中国32人, 韓国12人, ベトナム5<br>人, アメリカ4人, 台湾3人, ドイ<br>ツ, カンボジア, タイが各2人, ス<br>ウェーデン, インドネシア, イギ<br>リス, シンガポール, ネパール, オ<br>ーストラリア, モンゴル, ウズベ<br>キスタンが各1名) | 文化受容の親密な交流因子と対人コミュニケーション満足度において有意差が見られた。 |
| 15) 社交性                    | 岩崎<br>(1998)                      | 留学生 (N=257)<br>(韓国74名, 中国38名, 台湾25名。<br>アジア留学生188人)  | 社交性と留学生活への適応は正の有意なパスを示し<br>た。            |

### 3 動機づけ要因

- |                         |                          |   |   |
|-------------------------|--------------------------|---|---|
| 16) 留学の動機               | 田畑・<br>田中<br>(1991)      | 外国人留学生 (N=151)<br>(①東アジア: 中国・韓国・台湾・<br>香港②東南アジア・南アジア③西<br>欧: ヨーロッパ・北米・オセアニア<br>④中南米⑤中東・アフリカ中国・<br>韓国・台湾・香港のいわゆる漢字<br>圏が約半数で, アジア地域全体で<br>は8割強になる) | 日本に直接関連した来日動機があるものほど, 留学<br>生活への満足度が高い/受動的な動機で来日したも<br>のほど, 日本での生活になじみにくい。      |
|                         | 岡・<br>深田・<br>周<br>(1996) | 中国人留学生 (N=80)   | 交流領域の満足度は, 交流領域, 情緒領域と環境領<br>域の適応と正の相関, 言語領域の満足度は, 勉学領<br>域と交流領域の適応と正の相関関係を示した。 |
|                         | 葛<br>(1999)              | 中国人留学生 (N=13)   | 日本に直接関連した来日動機があるものほど, 留学<br>生活への満足度が高い/受動的な動機で来日したも<br>のほど, 日本での生活になじみにくい。      |
| 17) 学習態度・<br>意欲         | 吉<br>(1999)              | 中国人就学生 (N=209)  | 学習態度・意欲が心身の健康度に影響を及ぼしてい<br>る。   |
| 18) 達成<br>志向性・<br>調和志向性 | 樋口<br>(1997)             | 留学生 (N=62)<br>(アメリカ16人, オーストラリア<br>14人, 中国9人, ベルギー4人, カ<br>ナダ3人, イギリス3人, 韓国3人,<br>タイ3人, インドネシア2人, 台湾<br>2人, 香港2人, シンガポール1人,<br>ベトナム1人)            | 達成志向性, 調和志向性と適応感と強い関係をもっ<br>ている。  |

### 4 自己概念

- |          |              |   |                                |
|----------|--------------|---|--------------------------------|
| 19) 自己主張 | 佐野<br>(1990) | 留学生 (N=50)<br>(中国22名, 韓国/台湾18名, 非漢<br>字圏10名)        | 自己主張と全般的な適応の度合いとの関連が高かつ<br>た。  |
| 20) 自尊感情 | 岩崎<br>(1998) | 留学生 (N=257)<br>(韓国74名, 中国38名, 台湾25名。<br>アジア留学生188人) | 自尊感情は孤独感との間に負の有意なパスが認めら<br>れた。 |

### 5 文化的要因

- |                            |               |  |   |
|----------------------------|---------------|--|---|
| 21) 文化差                    | 佐野<br>(1990)  | 留学生 (N=50)<br>(中国22名, 韓国/台湾18名, 非漢<br>字圏10名) | 文化の異なる場合 (日本語の使用や文化の共通性の<br>少なさ) ほど社会的困難度は高い。 |
| 22) 自文化と日<br>本文化に対<br>する態度 | 早矢仕<br>(1997) | 就学生 (N=292)<br>(中国出身150人, 韓国89人, 台湾<br>53人)  | 「日本文化への積極性」の適応感に対する説明力が<br>見いだされた。            |

23) 文化受容 態度	井上・ 伊藤 (1997)	留学生 (N=50) (タイ8人, マレーシア6人, フィ リピン5人, カンボジア5人, シン ガポール5人, インドネシア4人, モンゴル4人, オーストラリア4 人, ルーマニア2人, ベトナム2 人, ネパール, ゼネガル, ナイジェ リア, モロッコ, ラオス, ハンガリ ー, 西サモア, パプアニューギニ アの国々がそれぞれ1人で, アジ ア系留学生がほぼ8割を占めてい る)	文化受容態度は来日1年後の精神的健康に影響を与 えた。
24) 文化適応度	湯 (2004)	中国人留学生 (N=91)	適応度と満足度, 主観的幸福感: 正
6 自己の能力に関する認知			
25) 自己効力感	早矢仕 (1997)	就学生 (N=292) (中国出身150人, 韓国89人, 台湾 53人)	中国人留学生において, 現在の自己効力感が適応感 に大きく影響している。
	孫 (2009)	中国人留学生 (N=182)	自己効力感が高いほど, 社会文化的適応がよく, 不 安が低いと示された。
26) 自国自文化 肯定意識	早矢仕 (1997)	就学生 (N=292) (中国出身150人, 韓国89人, 台湾 53人)	適応感に対する直接的な影響は大きくなかったが, 「自己効力感」を介しての間接的な影響が示された。
27) ピリーフ・ システム	吉 (1999)	中国人就学生 (N=209)	他者・状況のIRBと心身健康: 負; 自己のIRBと心 身健康: 正

注3: 主な結果は, 各研究で検討された結果について要約した。

## 【引用文献】

- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of cultural shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15 (4), 13-23.
- 天貝由美子 (2001). 信頼感の発達心理学—思春期から老年期に至るまで— 新曜社
- 綾部恒雄・小野沢正喜 (1979). 在日留学生の文化接触に関する文化人類学的研究 九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設, 30, 33-84.
- Berry, J. W. (1992). Acculturation and adaption in a new society. *International Migration*, 30, 69-85.
- Baker, R. (1981). *FSA (Freshmen's Scale for Adjustment)*. Research manuscript: Clark University.
- Baker, W.R., McNeil, O.V. & Siryk, B. (1985). Expectation and reality in freshman adjustment to college. *Journal of Counseling Psychology*, 32, 94-103.
- Baker, W.R. & Siryk, B. (1986). Exploratory intervention with a scale measuring adjustment to college. *Journal of Counseling Psychology*, 33, 31-38.
- Chirkov, V. I., Vansteenkiste, M., Tao, R., & Lynch, M. (2007). The role of motivation to study abroad in the adaptation of international students: A self-determination theory approach. *International Journal of Intercultural Relations*, 31, 199-222.
- Church, A. T. (1982). Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540-572.
- Derogatis, L.R. (1983). *SCL-90-R: Administration, scoring & procedures manual - for the R (revised) version*. Towson, MD: Clinical Psychometric Research.
- 江淵一公 (1991). 留学生の受け入れの政策と理念に関する一考察 「大学論集」 広島大学大学教育研究センター紀要20集, 33-68.
- 藤原武弘・来島和美・神山貴弥・黒川正流 (1987). 独居老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究 広島大学総合科学部紀要, 11, 43-52.
- Furnham, A. & Bochner, S. (1981). Social Difficulty in a Foreign Culture: An Empirical Analysis of Culture Shock. In A. Furnham & S. Bochner (Eds.), *Cultures in Contact*. Oxford: Pergamon Press. pp.161-198.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1986). *Culture Shock*. London: Methuen & Co. Ltd.
- Garce, G. D., & Schill, T. (1986). Social support and coping style differences in subjects high and low in interpersonal trust. *Psychological Reports*, 52, 1008-1018.
- Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. (1963). An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*, 19 (3), 33-47.
- 早矢仕彩子 (1997). 外国人就学生の自己認知、自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響 心理学研究, 68, 346-354.
- Hecht, M.L. (1978). The conceptualization and measurement of interpersonal Communication Satisfaction. *Human Communication Research*, 4 (3), 253-264.
- 樋口康彦 (1997). 留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について—達成志向性・調和志向性の観点から— 実験社会心理学研究, 37, 150-164.
- 広沢俊宗 (1985). 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究—対人関係を中心として— 広島大学大学院博士学位論文
- Hosseindoust, B. (1975). The study of adjustment Problems of Iranian students in the US. United States International University Dissertation.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.
- 岩男寿美子・萩原滋 (1988). 日本で学ぶ留学生: 社会心理学的分析 勁草書房
- 岩崎久美子 (1998). 日本における留学生の適応—適応モデルの妥当性と出身地域別相違— 産業カウンセリング研究, 2, 11-20.
- 吉沅洪 (1999). 中国人留学生のビリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響 学生相談研究, 20, 9-18.
- 吉沅洪 (2001). 在日日本人留学生の異文化適応に関する研究—ビリーフ・システムと自我同一性の観点から— 広島国際研究 広島市立大学国際学部紀要, 7, 183-199.
- Johnson, G. C., & Swap, W. C. (1982). Measurement of specific interpersonal trust: Construction and validation of a scale to assess trust in a specific other. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 1306-1317.
- 周玉慧 (1994). ソーシャル・サポートの効果に関する拡張マッチング仮説による検討: 在日中国系留学生を対象として 社会心理学研究, 10

- (3), 196-207.
- 周玉慧 (1995). 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討—在日中国系留学生を対象として— 心理学研究, 66, 33-40.
- Jou, Y. H & Fukuda, H. (1995a). Effects of social support on adjustment of Chinese Students in Japan. *Journal of Social Psychology*, 135, 39-47.
- Jou, Y. H & Fukuda, H. (1995b). Effects social support from various sources on adjustment of Chinese Students in Japan. *Journal of Social Psychology*, 135, 305-311.
- 周玉慧・深田博己 (2002). 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究 社会心理学研究, 17 (3), 150-184.
- 加賀美常美代 (2003). 多文化社会における教師と外国人学生の葛藤事例の内容分析—コミュニティ心理学的援助へ向けて— コミュニティ心理学研究, 7 (1), 1-14.
- 葛文綺 (1999). 留学生の異文化適応に関する研究—来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に— 名古屋大学教育学部紀要, 46, 287-297.
- 葛文綺 (2003a). 中国人留学生の適応度に影響を与える個人属性について 学生相談研究, 23, 274-283.
- 葛文綺 (2003b). 留学前後における対ホスト国イメージの変化に関する研究—中国人留学生と日本人留学生との比較を通して— 異文化コミュニケーション, 6, 117-130.
- 葛文綺 (2007). 中国人留学生・研修生の異文化適応 溪水社
- Kim, Y.Y. (1988). Preface. In Y.Y.Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Cross-cultural adaptation: Current approaches*. Sage.
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
- 松原達哉 (1991). 国際交流と留学生のカルチャーショックおよびストレスの問題 青少年問題研究, 40, 51-70.
- 松原達哉・石隈利紀 (1993). 外国人留学生相談の実態 カウンセリング研究, 26 (2), 146-155.
- 水野治久・石隈利紀 (1998). アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究 カウンセリング研究, 31 (1), 1-9.
- 水野治久・石隈利紀 (2001a). アジア系留学生の専門的ヘルパー, 役割的ヘルパー, ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学の変数の関連 教育心理学研究, 49 (2), 137-145.
- 水野治久・石隈利紀 (2001b). 留学生のソーシャル・サポートと適応に関する研究の動向と課題 コミュニティ心理学研究, 4 (2), 132-143.
- モイヤー康子 (1987). 心理ストレスの要因と対処の仕方: 在日留学生の場合 異文化間教育, 1, 81-97.
- 村上正人・桂載作 (1988). ストレスの早期発見, その対策と治療法—ストレス・チェックリストによる調査— ストレスと人間科学, 3, 9-12.
- 村田雅之 (1994). 留学生の「適応に要する時間」に関する分析 飯山論叢, 11 (2), 88-105.
- 永作稔・新井邦二郎 (2003). 自律的高校進学動機尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, 26, 175-182.
- 中島葉子 (2003). 在日留学生の行動面における文化受容—日本人の友人に対するコミュニケーション満足度との関わり—異文化コミュニケーション研究, 6, 25-41.
- Oberg, K. (1960). Cultural shock: Adjustment to new cultural environment. *Practical Anthropology*. July-August, 177-182.
- 岡田涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討: 自己決定理論の枠組みから パーソナリティ研究, 14 (1), 101-112.
- 岡益巳 (1992). 中国人私費留学生に関する実態調査—岡山県の場合— 岡山大学産業経営研究会研究報告書, 27, 1-26.
- 岡益巳・深田博己 (1994). 中国人留学生と就学生の意識 岡山大学経済学会雑誌, 26 (1), 1-28.
- 岡益巳・深田博己・周玉慧 (1996). 中国人私費留学生の留学目的及び適応 岡山大学経済学会雑誌, 27, 25-49.
- Russel, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. (1980). The Revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and Discriminant Validity Evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- 佐野秀樹 (1990). 異文化社会への適応困難度に関する研究—社会場面による分析— 行動療法研究, 16, 37-44.
- 佐藤真理子 (1995). 留学生の適応と文化的距離: 筑波大学留学生調査から 比較・国際教育, 3, 31-44.

- 佐藤真理子 (1996). 留学生の異文化適応—基礎的諸属性との関連— 比較・国際教育, 4, 31-41.
- 佐藤真一・長田由紀子・矢富直美・巻田ふき・林洋一・井上勝也 (1989). 中・高年における生活の志向性と満足度 老年社会科学, 11, 116-133.
- Sewell, W. H., & Davidsen, O. M. (1956). The adjustment of Scandinavian students. *Journal of Social Issues*, 12, 9-19.
- Singh, A.K. (1963). *Indian Students in Britain*. Bombay, Asia Publishing House.
- 宋愛芬・石川利江・神庭直子・池澤沙知・渡邊皓司・渡辺真理子 (2006). 在日中国系留学生の異文化適応におけるストレスとソーシャル・サポートに関する研究 桜美林論集, 33, 109-117.
- Spielgerger, C.D., Gorsuch, R., & Lushene, R. (1970). *The statetrait Anxiety Inventory (STAI) Manual*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 孫怡 (2009). 在日中国人留学生の異文化適応：パーソナリティ特性からの影響 人間文化創成科学論叢, 12, 241-248.
- 鈴木未央 (1995). イラショナル・ビリーフと適応の關係の發達的検討 平成6年度筑波大学教育研究科修士論文 (未公開)
- 田畑佳則・田中共子 (1991). 広島大学における留学生指導の現状と課題—留学の動機を中心にして— 広島大学留学生センター紀要, 2, 43-63.
- 高井次郎 (1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大學教育學部紀要. 教育心理学科, 36, 139-147.
- 田中共子 (1998). 在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から 教育心理学年報, 37, 143-152.
- 田中共子 (1995). 在日外国人留学生による日本人との対人關係の困難に関する原因認知 学生相談研究, 16, 23-31.
- 田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 田中共子 (2003). 日本人学生と留学生の対人關係形成の困難に関する原因認知の比較 学生相談研究, 24, 41-51.
- 田中共子・藤原武弘 (1992). 在日留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討 社会心理学研究, 7, 92-101.
- 田中共子・田畑佳則 (1991). 外国人留学生の日本生活における問題—留学の動機および満足感との關係— 中国四国教育学会 教育学研究紀要, 37 (1), 364-369.
- 田中共子・高井次郎・神山貴弥・村中千穂・藤原武弘 (1990). 在日外国人留学生の適応に関する研究 (1) —異文化適応尺度の因子構造の検討— 広島大学総合科学部紀要, 14, 77-94.
- 田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘 (1990a). 在日外国人留学生の適応に関する研究 (3) —新渡日留学生の半年間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応— 広島大学留学生センター紀要, 1, 77-95.
- 田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘 (1990b). 在日外国人留学生の適応に関する研究 (1) —新渡日留学生の一学期間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応— 広島大学総合科学部紀要, 14, 95-113.
- Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T., Fujihara, T. & Minami, H. (1997). Effects of social networks on cross-cultural adjustment. *Japanese Psychological Research*, 39, 12-24.
- 田中共子・横田雅弘 (1992). 在日留学生の居住形態とストレス 学生相談研究, 13, 51-59.
- 湯玉梅 (2004). 在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の視点から— 国際文化研究紀要, 10, 293-328.
- 植田智・吉森 護・有倉巳幸 (1993). ハッピーネスに関する心理学的研究 (2)：ハッピーネス尺度作成の試み 広島大学教育学部紀要. 第一部, 心理学, 41, 35-40.
- 上原麻子 (1988). 留学生の異文化適応 広島大学教育学部日本語教育学科 (編) 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究, 111-124.
- 上原麻子 (1992). 外国人留学生の日本語上達と適応に関する基礎的研究 平成2年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 植松晃子 (2004). 日本人留学生の異文化適応の様相：滞在国の対人スキル, 民族意識, セルフコントロールに着目して 発達心理学研究, 15, 313-323.
- 徐光興・蔭山英順 (1994). 在日中国人留学生の適応に関する実体と問題 名古屋大學教育學部紀要. 教育心理学科, 41, 39-47.
- 山岸みどり (1995). 異文化能力とその育成 異文化接触の心理学 渡辺文夫編著 川島書房, 201-219.
- 山本多喜司 (1986). 異文化環境への適応に関する環境心理学研究 昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 山崎瑞紀 (1993). アジア留学生の対日態度の形成要因に関する研究 心理学研究, 64, 215-223.

- 山崎瑞紀（1996）. アジア出身の留学生及び就学生の日本観 学術研究—教育心理学編—「早稲田大学教育学部」, 44, 41-49.
- 姚霞玲・松原達哉（1990）. 留学生のストレスに関する研究（1）—生活ストレスを中心に— 学生相談研究, 11, 1-11.
- 井上孝代（2001）. 留学生の異文化間心理学—文化受容と援助の視点から— 東京：玉川大学出版部
- 井上孝代・伊藤武彦（1997）. 留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康 心理学研究, 68, 298-304.
- 横林宙世（2001）. 地域・大学の規模による留学生と日本人学生の認知差—留学生の異文化適応要因の観点から— 国際言語文化研究, 7, 109-122.

#### 【参考ウェブサイト】

日本学生支援機構（2009）. 「平成21年度外国人留学生在籍状況調査結果」 <http://www.jasso.go.jp/>（2010年9月22日に閲覧）

#### 【謝辞】

本論文の執筆にあたり、ご助言いただいた小野寺敦子先生（目白大学人間学部教授）に心より感謝申し上げます。

## A review of psychological studies on the cross-cultural adaptation of international students in Japan

Hongyan Tan                      Mejiro University, Graduate School of Psychology  
Tsutomu Watanabe              Mejiro University, Faculty of Human Sciences  
Hiroyuki Konno                 Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2011 vol.7

### **[Abstract]**

The purpose of this study was to review the psychological researches on the cross-cultural adaptation of international students in Japan, in order to examine the factors which influenced on these students'adaptation process. First of all, the concept of the cross-cultural adaptation was explained. Next, international students'current everyday life difficulties were discussed. And the international students found that the human relation was the most difficult problem. More, the index of the cross-cultural adaptation was explained. Afterwards, factors relating to the cross-cultural adaptation were examined. As a result of this review, various factors such as the attribute factors and the interpersonal factors were suggested to influence on the adaptation of international students. Finally, the present review proposed the necessity of the idea that we have to distribute the index of the cross-cultural adaptation in each domain, the shortage of a study based on a theoretical background, the shortage of the examination of cross-cultural adaptation process, the necessity to conduct the study from the point of the birthplace and the necessity of the longitudinal study.

**keywords** : international students in Japan, cross-cultural adaptation, motivation, trust